

---

# 優しい嘘

池碧葉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

優しい嘘

### 【Zコード】

Z2936U

### 【作者名】

池碧葉

### 【あらすじ】

幼い時から、近所に住んでいた加奈、学生時代は、想いを告げれずそのまま社会に出て行ってしまった。社会に出てから幼馴染に再会をした加奈は、想いを告げれるのか…

成人してからの恋愛になりますので、R15には引っかかるかな?  
初投稿になりますので、お手柔らかに願います。

## 想い

君に対する想いに気づいたのは、小学生の時だった。

小学生高学年になって、クラスが別になり、人づてに好きな子がいて、付き合い始めたと聞いた。

家が向かい同士だったので、距離を置こうと朝も挨拶を交わすだけになつた。それから、お互に余所余所しくなつていつたよね・・・

君を思つ気持ちに蓋をして、同じクラスの子を気になるように好きなるように気持ちをその人に向けていった。

中学時代には、綺麗な彼女がいつもいて、

私は見なかつたふり、聞かなかつたふりをして、  
君の事を忘れるように部活に励んだ。

他の人を好きなるように努力をしながら・・・でも、その人も好きと言葉ではいくらでも言えるけど、心が共なつていないことに気づかれたのかな、つき合つまでは発展しなかつた・・・。

高校時代は、別の学校に進学した為に、滅多に顔を会わすことが無く、

会つたとしても、すれ違うだけ・・・

私も、学校の友達を通じて彼氏を紹介して貰つたりしながら、徐々にだけど、君の事を想わないように、気にしないようにしていたんだよ・・・。

短い期間で別れてしまい、「次、紹介をしようつか?」と友達に言われた。でもね、心の奥の小さな灯が拒否するので断り続けたんだよ。

高校2年の冬辺りから、夜、犬の散歩で出歩いていると、よくすれ違ったね・・・。

ねえ知つていた?  
気づいていた?

あの頃は、まだ君の事が気になつていたんだよ。  
バイトの帰宅時間に合わせて、犬の散歩をしていたなんてしらなかつたでしょ?

でもね・・・、君を想うことに蓋をして頑丈な鎖で封じ込めてしまつたので、自分の気持ちがわからなくなつてしまつた。心の奥底に小さな灯はついていたのにね・・・。

そのまま時間が過ぎ、高校を卒業をして、君は上の学校へ、私は会社勤めを選んだ・・・

くく【続】

## 想い（後書き）

誤字脱字がありましたら、教えて戴ければ幸甚です。

## ～～（前書き）

前話から、少し時間が流れて・・・  
想いを告げずに、そのまま進んでしまうのか、  
すれ違つたまま時間は過ぎてしまうのか・・・

働きはじめて、あつといつ間に時間が過ぎた――――――

2年目に入り新しい部署に行かされて、やつと慣れてきた頃、

会社の近くに、Cafeが新しくでき、  
中で働いている人で、イケメンの人が多いよ。と、近所にある、他  
会社の女性社員も噂になるほどだつた。

イケメンの人を一目見たいといつ、同期の女性社員に私は断つたが、  
両腕を持たれ引きずられてCafeに向かうことに・・・

私は、滅茶苦茶不機嫌で、「イヤだつて断つたのに・・・。」と小  
声で文句を言つていると、奥の方から女性の団体様が出口に向かっ  
て歩いていた。

案内されて席に座り、同期の女性達は、ソワソワしていく・・・

私は興味が無いので、店内をキヨロキヨロと見まわしていた。

内装は好みだったので、一人でも来れるかなーーと、内心思つてい  
ると、

周囲の女性達がザワザワし始めた。

私は、この騒がしさが無ければ良い雰囲気なのに・・・と物想いに

耽つてゐると、

周りにいた同期の友達が

「キャー、じつちに来るよ～？」

「「イケメンだよね～」」とザワザワ・・・

私はあまりの五月蠅さに辟易して、顔を背け窓の外をボンヤリと見ていた。

「…な、か…な…？か～な～つ…」と自分の名前を呼ばれてゐる」とに気づき、

「なに？」とボンヤリながら、友達に答えると…

「えっ！加奈か？！」と男性の声が聞こえ、そなりて視線を向けると――

私は、男性の顔を見た瞬間、ボーコツとしていた意識が一気に覚醒した。

～～（後書き）

誤字脱字ありましたら教えて戴ければ幸いです。

### 第3話

びっくりして、ボーナーとしている私を見て、クスッと笑った男性：

それは…

その人は…

中学時代、君の事を見ないようにしていた時間に、目を向けていた人だった。

「な…なんで？」

「なんで？」

「ここにいるの？」

「んつ、バイトしているんだ～。」

「……」

「どうした？」と声を掛けられた時、

周囲に居た同期の女性達が興味深々で聞いてくる。

「知り合いなの？紹介して？」つて…

私は何と言つていいかわからず困惑つていると…

男性の方から、

「高橋です。えつと…か…、田川さんとは、中学時代の同級生なんですよ。」と笑顔で言った。

同期の人達から、

「え~~~~つ！ 加奈ちゃん何も言わなかつたよね。 知らなかつたの？」

「…連絡取つてないし…。 知らんわ。」 と小さな声でボソッと言つ  
と、

聞こえなかつたのか、 聞いていないふりなのか、

同期の人達が、 高橋君と喋りはじめた。

少し時間が経つ、

昼の休憩時間10分前だとこつこつと氣づく…

同期の彼女達が高橋君を引きとめていたので、 奥から責任者なのか  
男性が出てきた。

その男性に気づいた高橋くんが、 私の座つている席の横にたち、 お  
辞儀をする角度で顔を近づけ耳の傍でこつ囁いた。

「吃驚して、 気絶するなよ。」 つて――

私は、 頭の中に疑問符を浮かべキヨトンとしていると…、 高橋君は  
ニヤリと笑つた。

高橋君の後ろから呼ぶ声が――

なぜか、 記憶に残つてゐる男性の声で…、

私は高橋君に言われた通り、吃驚して少し真っ白になっていた。

男性が近くに来た時、高橋君の影で私が座つてこむことに気がついた。

「やつやく来たのか…。」とため息をつきながら隣の男性へ、

私は、心の中で、なんで?...ここにいるの~?...と呟んでいた。

【  
続

### 第3話（後書き）

誤字ありましたら指摘していただければ幸いです。

\* 4 \* (前書き)

前話からの続きです。幼馴染の名前、いじめられで先に出せた・・・

2年ぶり?の突然の再会に驚いて、  
口をパクパクしてしまった私を見て、

「金魚みて つ!」と爆笑している幼馴染こと“広瀬一史 (Kazushiro Hirose) ”

「笑いすぎだぞ!」と注意する高橋くん、

周囲の興味深々の顔から逃げるよつて、レジに向かい——

会計を済ませて先に店の外に出た。

昼休み終了ギリギリで会社に帰った私を見て、一緒にランチした同僚は話しかけたくてウズウズしているらしく……

帰社時間になつても仕事をしている私を見て「残業なんて明日でもいいんでしょ? 話聞かせてよ。」と言つて、周囲を囲まれ逃げれないよう更衣室に連れて行かれ……

更衣室で、あの一人は同じ中学の同級生と答えた。

「紹介をして?」と言われたが、

『連絡先も知らないので無理です』と言つと「使えね~」と言われる。

私は、またか…と心の中でため息をついた。

\* 4 \* (後書き)

お気に入り登録ありがとうございます。感謝感激です。  
頑張つて更新しなきやと思つています。

\* 5 \* (前書き)

じれじれしています。

数日後——

会社が盆休みに入り、実家に帰った私は暇を持て余していた。

隣市にある映画館に行ったり、近くの本屋に行つて気になつていた文庫本を何冊も買い込み家に帰つて読みふけつてみたりしていた。

一史は、バイトが忙しいのか実家には帰つてきていないうじいことを、母親から聞かされた。

休みが残り2日になつた朝、7時に携帯が鳴つた。

携帯が鳴つていた時、ベットで寝ていた私は、寝ぼけて枕の傍を探すが見つからなくて電話が切れてしまつ···

携帯の着信音ですっかり目が覚めてしまつた私は、履歴をみると知らない番号なので間違い電話か何かだらうと思い、折り返しの電話はしなかつた。

着替えようつと思い、寝ている時にきていたパジャマを脱いだところで再び携帯の着信音が鳴つた。

やつぱり見覚えのない番号なので、少し緊張して着信ボタンを押し、

よそいきの声で「も・・・もしもし?」と言つと、

「加奈?おはよう、一史だけど。」と聞き覚え声より若干低く聞こ

える。

「お、・・・・おはよ。なんで一史が番号を知っているの?」

「ん、おばさんから聞いていた。」

「は? うちの親から?」

「おう、休みの間中暇を持て余して、ロロロロしてこむから、どうか連れだしてくれないか? つてな」

「・・・・・・」

「加奈、今日も暇なら外に出てくれないか?」

「今日も?」

「うつ、いやか? 海に行く予定があるし、俺は# \$ % & . . . し

「なに? 聞こえない。」

「な・・・なんでもいいだるのーと・・・とりあえず水着を持って下に降りてこいな。」と言つて通話を終了してしまった。

行くと返事してないのに、普通言つだけ言つて電話を切るかーーとイラッとする。

イライラしていたが、そいつえば水着を今年は買つてないなーと言つことを思いだした。

昨年の水着では流行遅れだけどつじよつかと、考え込んでいた。それも上半身はパジャマを脱いだまま下着も付けていない状態で・・・

あんな恥ずかしい思いをするとまづつてもみなかつた。

【続】

\* 5 \* (後書き)

誤字脱字・言い間違いとか見つけましたら、教えて頂ければ嬉しいです。  
次回は、\*\*\*\*\*で目線が変わります。

\* 5 - 2 \* (前書き)

前話の続きをでゅので、5 - 2とれせていただきまゅ。R15へりこ  
?

\*\*\*\*\*

携帯を切った後、いつまでたっても降りてこない加奈に、イライラし始めた。

玄関先で待っていた俺は、加奈の家のドアを開けた。

ドアが開いた気配を感じたのか、加奈のお母さんが出てきて「おはよう、早いわね。一史くん来てくれたんだ。手間かけさせるわね。そのまま部屋へどうぞ～」とニッコリ言われ、

「朝早くすみません。お邪魔します。」と言い、そのまま廊下を歩き階段を上がり加奈の部屋へ向かつ。

加奈の部屋の前へ立ち、深呼吸をしてドアを軽く一回ノックする。返事が無いので、「加奈、まだか?」言いながらドアを開けると、着替えていたのか上半身裸で下着を持ったままの加奈が目の前に立つていた。

驚いたのか軽く目を見開いて・・・、口をパクパク。

俺は思わず?そのまま視線を胸の方へ向けてしまいいー

加奈は「ぎやあああ～～～っ!」と叫んだ。

俺は「つむせえ～」と言い、加奈の口を手で塞ぐつとすると、バシッと手を振り払われ、俺も力チンときて、その後はお約束??

「一史のエッチ、スケベ……」などなど俺の悪口のオンパレード・・・

しまいには遊びに行かないと言いだすので、宥めたり持ち上げたりしてもダメで、最後にはなんとなく脅しといつ手を使い無理やり連れ出した。

家の前に停めてあつた車の助手席を開け加奈を放り込み、急いで運転席に座りロックをすると深一いため息をついた。

「あ～～、疲れる～～。」こんな事でなんで体力使わなあかんねん。」

と言つと、

「立腹中の加奈が「だったら誘わなければ良いでしょ。」と睨みながら言つて、

「のままだと、絶対に言つてやると思った俺は、

「・・・・・」無言で返す。

「・・・・・・

「車出すぐ。シートベルトしき。」と言つと

「わたし行くと言つてない。」と最後のわるあがき言つので、俺は助手席側のシートベルトに手を伸ばし、カチンとロックをした。

運転席に身体を戻し加奈を見ると、近づき過ぎたのか、耳まで真っ赤になつて固まつっていた。

\* \* \* \* \*

家の前に停まっていた車は、一史のおじさんの車で、助手席に放り込まれ（ヒドイ扱いだし…）、運転席に座りロックするとブレーキがかかる。＊＊＊＊＊

わたしもムカついていたので、「だったら誘わなければいいでしょ。」と言こ返すと、一史が無言になつた。

わたしも氣まずくなり黙つていると、「車、出すぞ、シートベルトしろ」と言つので、ムカついたまま「わたし行くと言つてなこ。」と叫び、ハンドルを伸ばしてくる。

言こ返してばかりいたから怒つてゐるよね…。叩かれるのかなと思こギコシと臉をつぶると…。

フワツと温かい空気が傍にきて、フワリと優しいけどスッキリ系の男性的な匂いがして、薄く臉を開けると一史の顔がわたしの肩の傍にあり、一史の腕がわたしの胸の前を通り身体の横でベルトを口ツクした。

わたしはそれだけでも緊張というか恥ずかしくなつてしまい、耳まで熱くなつたのがわかつた。

一史は固まつてゐるわたしを見て、緊張をほぐすように頭をポンポンと軽く叩かれ、前を向きエンジンを掛け運転し始めた。

運転中は、話しかけてはいけないかなと思つて、窓の外をボーーと

見たり、運転中の一史の横顔をみたりキヨトキヨトしていると、「落ち着きが無いな～、緊張しているのか?」とからかってくる。

「一史の運転つて初めてだし、ちょっと緊張する～」と言つと、「加奈の運転よりまし・・・」と言つ、ムツとするひとを言われたがスルしてやつた。

住んでいる場所から、南下して某自動車道に入ると、

今日、行く場所が同じ大学のサークル仲間でグループ交際で海にいくことになつたが、一史はフリーなのでわたしを連れて行くことになつたと聞かされた。

同じサークルに好みの女性はいないの?と聞くと、「好きな人がいるし、その人だけと思っているので付き合いたくない」と言う、好きな人がいるんだつたらその人を誘えばいいだろ〜〜と思つた。

【  
続】



\* 5 - 2 \* (後書き)

あれ、進まない…、視点が□□□□変わって読みにくかったり「めんなさい。

次回は、海～

誤字、言い間違いが見つかりましたら教えて下されば嬉しいです。

\* 6 \* (前書き)

海到着です。時期外れで「めんなさい」。いつもより長いです。

海水浴場について、待ち合わせ場所に着くと、一史と同じカフュでバイトしている高橋クンと、知らない人ばかりだった——

一史と高橋、同じ大学の友達の男3人で、大学の同じ学部の女性が3人とわたしで女が4人…、一史が誰も連れて来ないと思つたらしく、気を利かせて声を掛けたらしい…

わたし一人、余計だし邪魔だよね…と思つていると、

大学の友達と先に歩き出した一史が、少し離れて遅れ気味に歩いているわたしに気づいたのか、高橋クンに何か言って、こっちに向かって歩いてくる。

一史の後ろに見える、同じ大学の女の子達がわたしの方を見て、ヒソヒソ話しているのが見えた…。それを見て、イヤだな、もうメンドクサイし帰りたいし…と思つたため息をついた。

「か～な～？」

「…わたし、あぶれているし邪魔ものだし…、帰ろうかな～」

「だ…ダメ、だ。あいつらが、まさか連れてくるとは思つてなかつた。」

「ふーーーん、そ・う・なんだ～？」と言つて睨むと…

「う…、う…ごめん。」と言つて、なんかしょげている。

わたしより200cm高い身長なのに、罰が悪くて小さくなっている一史の姿を見て、犬が飼い主に怒られて、耳をペタッと伏せて尾を下げる姿が浮かび上がる。

「タレている一史を見て、もういいや」と思い、一人でクスクス笑っていると…

わたしの機嫌が直ったと思ったのか、近づいてきて腕をグイッと掴まれ、スタスタと先に歩いている友達に追いつこうと思っているのか、早めに歩く…

わたしは付いていくのに必死で、時々引きずられそうなる――

売店で、パラソルを借りている友人達に追いつき、一史がわたしを紹介する。

“幼馴染で、大切な人なので…”…という言葉に、私は疑問符を浮かべてキヨトンとしていると、何かを知っている高橋クンがわたしの方を見てニヤッと笑った。

一史が、別にパラソルを借りて、お友達さんの隣に立てる、わたくしが水着を持って来ていないので、「荷物番をしているよ」と言つと、

「すぐ、戻るから」と言つて、海の傍で遊んでいる高橋クン達の所に走つて行つた。

パラソルの影でひとりでシートに座り、ボニーと海で遊んでいる一史達を見ながら、暑い～うだる～～と思つてると、近づいてきた男性2人が声を掛けってきた。

暑さで機嫌が悪くなつてきているので、適当に聞き流していると、高橋クン？が連れてきていた女性達がキヤピキヤピとはしゃいで近づいてきた。

知らない男性がいるのが分かり、機嫌がわるくなつていく、一史達男性陣――

声を掛けてきていた男性達が、キヤピキヤピモードの女性達に声を掛け始めるので、"うわー、軽すぎつ！"と思つて見ていると、いつの間にか一史がわたしの傍に来ていて、「大丈夫か？」と氣づかう。

「ん～、大丈夫だよ～」と言つて、ニクラと笑つと、

気が抜けたのか頭を軽く撫でた。

声を掛けてきていた男性達を追い払つて、

「お風にするぞ～」と言われ、海の家にゾロゾロと向かう。

わたしは、暑さでバテテきていたので、一史が食べていた焼きそばを、少し貰つて食べてかき氷を食べた。

一史に大丈夫か?と気遣われながら、パラソルの下へ行く…

わたしをパラソルの日陰に座らせて、「ジュースを貰つてくる」と言つて、海の方に歩いていき、姿が消えると…

隣のシートに座つていた一史の同じ大学の女性達が声を掛けた。

「広瀬君とどういう関係?」

「大切な人つて、何?」矢継ぎ早に言つ。

急に頭が痛くなつてきて、声がワンワンと耳の中?頭の中で響きはじめて、自分でもおかしいと感じ始めたとたん、急に胃がムカムカし始めた。

何も言わないわたしにイラッとしてきたのか、一人の女性が、「聞こえているの!?」と言つて、肩を押してきて、わたしがそのままグラッとして倒れかけた…と思つたとたん、誰かに支えられた気がした。

わたしの名前を呼ぶ声が聞こえたが――

答へる」ことができなこまも、意識が沈んでしまつた…

\* 6 \* (後書き)

キヤピキヤピッて、死語？

あと、お約束？？

閲覧数5000超え、お気に入り25件超えていました。

評価もありがとうございます。

文章を投稿時に、何度も読みかえしていますが、誤字脱字、言い間違いを見つけましたら、ご指摘をして下さい。感想も、お待ちしています。

意識が浮上してきた、瞼を開けると――

モニモ――

わたしの部屋のベッドの上だった。

身体を起しゃうとするとい、フリッシュするのでベッドに再び寝転んだ。

ん？わたし海にいたのになんですか？？イロイロと聞こ出しつづけると、ドアの外からコンコンと音が鳴り、わたしは「へーい」と返事をするど、ドアが開き、

「なにが、”へーい”だ。」と聞こ、少し心配そうな顔？をしながら一史が入ってきた。

一史がベッドの傍の椅子に座ったのを見て、？？と頭の中に疑問符が浮かぶ。  
「具合どうだ？」  
「ん～、少しきらつとする。」と語り、額に掌を当してくる。  
「きなり顔を触られる」とこ慣れないのと、片眼をしかめていると、

「少し熱いくらいか…」

「熱い？わたし風邪だつたの？？」

「誰が風邪だつて！」と少し大きな声を出いた一史に驚くが、声が頭に響いて痛みが出てきた。

痛みがあるので、一史の説明を聞いていると、

海で倒れたわたしを、一史が近くの救急病院に運び、軽い熱中症と診断され、点滴をして、終わって帰宅し・た・ん・だ。  
以前から体調が悪いとか無かつたか聞かれ、暑さでバテテいたと言つと、軽一くため息をつかれた。

「体調が悪かつたなら、朝、会つたときに言へよ。」と言つので、「強制的に連れだしたくせに…、言つ暇なんてビリにありましたっけ？」と答えると  
「はいはい、俺がわるい」やれこました。「めんなさい。これでいいか？」と言つので、  
頭の痛みとかでしんどくなつていたわたしは、

「…………もう、いい……」と言つて、一史に背を向けてタオルケットを頭までかぶつた。

「かーな？かなさーん、加奈ちゃん」とわたしを呼ぶ声にシカトしていると、

はあーーとため息をつかれ、暫くお互に無言になる。

少し時間が経ち、もぞもぞとしてケットから顔を出すと、ジロジと睨まれる。

「な…なに？」

「いや…、なんでもないわ。」と言つて、再びわたしの方に手を伸ばしてきて、頭に手を置き、クシヤクシヤとかき回した。

「な…なにをするんだ~」と語りと、  
クツクツク・・・と笑い、「帰るわ。」と言ひて、椅子から立ち上がる。

「え、えっと、か、一史、今日は、海に連れて行ってくれてありが  
とう。良い気分転換になつたし、おまけが付いたけどね。」と苦笑  
しながら語りと、

「加奈が、良いと思つたらいいんじゃねえの?」と笑いながら語り。

「またな」と、わたしの方を見て言い、ドアを開けて出て行つた。

次の日は、夏休み?（盆休み）が最終日なので、明日からの仕事  
に、差し支えが無いように家でジッとして体調を元に戻すことにつ  
た。

普段通りの生活に戻り、

カフェで、高橋くんや一史の姿を見かけるが、バイトしている時  
にはお店に入らず。人が多いしーー

大学の講義がある日はいないので、その時には2人のファン?が  
いないので、五月蠅くないし、お店に入る。

海に行つた後から、避けていたのもあるし、久しぶりに話が出来  
たのは、月末の〆日で遅くまで残業しているときに、軽食を一史が

バイトしているカフェに頼み、一史や高橋くんが持つてくれた時に、少しだけお喋りをしただけだった。

その時に、高橋くんがファン?の人達と携帯のアドレスとか教えていたのかな、

恐怖の残業日が過ぎて、少し時間がった頃に、合コンをするので参加しろ同期や先輩方に言われた——

\* 7 \* (後書き)

少し飛ばしました。割愛しますが、  
誤字脱字が見つかりましたら、『指摘して下さい。』 読後の感想もお  
待ちしています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2936u/>

---

優しい嘘

2011年10月6日14時51分発行